

璉城寺通信

第72号

2023年1月1日

〒630-8307

璉城寺通信編集委員会
奈良市西紀寺町45番地
TEL 07422214887



明けましておめでとうございます

年が明け コロナ去り 楽しみ来たれ

下間景甫

恒例の年越し念仏会で皆様と一緒に新しい年を迎えました。今年も皆様に支えていただきお寺をお守りしていきます。よろしく願います 🌸

年越し念仏会に参加いただいた皆様と年越し蕎麦を食べながらいろいろお話しました。とくに「京終サロン」の成り立ちや「璉城寺通信」を発行する「友の会」の発足など、そのいきさつなどが話題になりました。「京終サロン」は110回を越えて開催していること。「璉城寺通信」は18年目になること。「お互いに齢をとりながらよくもまあ頑張っている」と話に花が咲き、年越しにふさわしい蕎麦会になりました。

師走中頃からの寒さに体がビククリしています。

雪が例年より多いとニュースを見て、北陸や東北の方々の大変な雪かきや雪降ろしの作業に敬服しています。

コロナ対策のマスクはまだ取れませんが、お寺の行事や京終サロン、ヨガ、歌会などができるようになったことはとても嬉しいことです。集まってはそれぞれの健康を確かめ合う光景が目につきました。早く何も気にすることなく集まりたい気持ちです。

振り返ってみると、昨年は ” コロナ禍でもやれることはやる！” という前向きな気持ちでいろいろと実施しました。阿波丸犠牲者慰霊祭 お念仏会 秘仏開扉 地藏盆 サロン ヨガ歌会！

皆様のお陰でこうしていろんな催しができることに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

歳を重ねるごとに、みなさんと何かをすることが一段と楽しく感じます。やはり仲間の大切さが自分自身を元気付ける秘訣かもしれません。

お地藏様が隣の町内からお寺（璉城寺）に來られました。長い間、新屋敷町をお見守りされていましたが、お借りしているお屋敷が期限切れとなったため、是非、近くの璉城寺でお預かりして欲しいとのことで、いま鎮座されているお地藏様の側に安置させていただきました。可愛いお地藏様です。これからも私たち町内の安全を見守ってくださいさることでしょう！

お正月前の大掃除・・・孫が大きくなっていろいろと手伝ってくださるようになりました。お陰様でとても助かりました。あの小さかった子がこんなに大きくなってお手伝いしてくれるとは！ その分、自分が歳を重ねていることを実感しました。老いては子に従えの言葉が身に刺さります。

先日お参りに來られた方が ” 今年は今までやってきたこと（催し）をやろう！” と声を掛けてくれました。

そうですね！ 大人のお月見会！ ファッションショー・・・

待って下さっている方がたくさんおられます。是非やりましょう！と、意気投合しました。コロナ感染で人が集まれなくて諦めていたことがよみがえるかと思うと胸がわくわくします。毎年、お寺も忙しくなっています。とても有難いことです。健康に気をつけて、皆さまが足を運んでくださる、集まって下さるお寺であるように頑張っていきます。

合掌



京終さろん



10月さろんは、山の寺念仏寺住職で元興寺文化財研究所の研究員でもある三宅徹誠さんの「袋中上人の生涯と山の寺念仏寺の創建」でした。

念仏寺は近鉄奈良駅の近くにある開化天皇陵に接して建てられているお寺です。

400年前（元和8年・1622）71歳になった袋中上人がこの寺を創建したわけですが、三宅さんは上人の生涯を時系列的にお話されました。

袋中上人は天文21年（1552）福島県いわき市で生まれ、7歳で叔父が任職を務める能満寺に入り、14歳で剃髪受戒、袋中と命名されました。袋中とは『史記』から命名。袋の錐は外に突き出るように能力ある人は自然と表れる意味です。青年時代は地元浄土宗の寺や江戸（増上寺）で修行。30歳で梵字をめぐって真言僧を論破し、いわき藩領主（岩城貞隆の帰依を受けたが、関ヶ原のあと察量を没収されて浪人となった。その時、明へ渡ろうと決意したが中国への入国は困難でルソンへたどり着いた。ついで琉球へ渡りここで3年間すごした。琉球王・尚寧王は帰依し袋中のために桂林寺を建て念仏を広めた。ニンブチャー（念仏者集団）やエイサーがその名残とか。帰国後、京都に住むが奈良に移住したのは71歳、元和8年（1622）、ちょうど400年前だった。移住の動機は「智光曼荼羅」を拝するためだったが、元興寺の曼荼羅は見つか

らず、奈良の古寺の退廃を嘆き、仏法の根本、釈迦に立ち返ろうと目指し、寺院を建立したのが念仏寺であった。

.....

11月京終さろんは「興福寺五重塔



令和の大修理」をテーマに辻明俊興福

寺執事のお話でした。奈良のシンボル、五重塔が120年ぶりに修復することになり、工事期間の9か月間にわたってその姿が見られなくなります。

興福寺五重塔は光明皇后の願いによって創建され、四度の落雷と一度の兵火によって焼失していますが、そのつど再建されてきました。



治承4年、平家の焼き討ち後の再建には東大寺大仏を再建した重源上人が心柱を施入したと記録されています。直近では明治33年から35年まで修理し、その後避雷針を設置しています。

五重塔は一昨年からの調査によって屋根瓦のズレや破損が見られるため、瓦の全面葺き替えや組物（大斗）、台輪のズレの補修、漆喰壁の塗り直しなどで総工費約47億円が予定されています。

辻さんは、修理に関連して仏教にとつての「塔」とはどんなものか。インド、中国の塔と日本の塔との類似と相違点、日本での木道建築は気候に対応して独自に考案された技術の高さなどについてもお話されました。質問コーナーでは、工事中の内部見学、登ることができるか。不要瓦を買い取りたいなどの声があり、いずれも可能性ありとのこと会場は期待に湧きました。

.....

12月例会は「年がら年中饅頭祭り・奈良には饅頭の神様が」と題し奈良と和菓子の応援団長・太鼓打源五郎こと小関吉浩さんが登場。桜井市出身・御杖村在住、韓国神社韓国講・桃俣獅子舞保存会・菟田野祭文音頭保存会、元宇陀市立小学校校長などその活躍は多彩・・・。



和菓子の故郷は大和です。田道間守が常世の国から非時香果（ときじく）を持ち帰った伝説が始まります。遣唐使が大陸から持ち帰った唐菓子……。実は南北朝時代の1349年来日した林浄因（りんじょういん）が中国から持ち込み、肉饅頭の中身を小豆に作り替えたのです。

しかしこの時代にはたぶん砂糖はなかったはずですが、それでも庶民に喜ばれ、普及していったのでした。その立役者林浄因は近鉄奈良駅近く、漢国神社境内に林（りん）神社にまつられています。

饅頭は奈良の武将（古市・松永）たちの愛好物となり、安土桃山時代には村田珠光のお茶会に用いられ、江戸時代、公慶上人による東大寺大仏の再建供養に一日4万人が宿泊したという人々によって全国に広がったのでした。当時、奈良町の菓子屋が25軒あったとか。村井古道が『南都名産文集』（1713年）に記録しています。

菓子の歴史につづいて郷土に根付いた「お菓子」のなかに、正月のお供え餅「あたたき」（重ね餅）と「いただきぜん」（お供え餅）の紹介があり、は地元の人でも知らなかったようでした。



度と渡の字

橋本健一（名古屋市長）

我家の檀那寺乗西寺住職が毎月の御務時に唱えられる『三帰依』文の前半に「人身受け難しいますでに受く。仏法聞き難し今すでに聞く。この身今生において度せずんば更にいづれの生においてか、この身を度せん」とあります。

さらに唱えられる『正信偈』は葬儀時に参詣者たちが就職に合わせて唱えています。「心至滅度願成就」「為度群生彰一心」とあり、仏教において「わたる」に用いる文字は「さんずい」の付かない「度」を用い、母が生前に毎日読誦していた『般若心経』に載る「五蘊等皆空度一切苦厄」もしかりで例外もあります。

『妙法蓮華経』薬王菩薩本事品の「この経は能く一切衆生を救う者なり……子の母を得たるが如く渡りに船を得たるが如く……」がこれです。漢訳仏典に載る「度」は、ほとんど「渡」の意味になり漢語の「度」は本来「渡」に通じる日本でも古代から「度」に「渡す」の訓があるのは「渡航、渡渉」の文字に見え、『万葉集』二〇五四「風吹きて川波立ちぬ引き船に度里も来ませ夜の老けぬ間に」とある。

「度」の字は呉音が「ト」ですから「渡世・度者・济度」などが見られ、漢音は「ト・タク」ですから「法度・付度」などが見られる。ただし現代中国語に「度」は「わたる」の用い方はなくて計測関係においての回数のみぎみに用いている。

「度」は『漢書』第二十一卷律曆志上に「長短を度る所以なり」とあり、本来は「はかる」であるから法制・制度の意味になる。因みにサンズイ偏の付く「渡」を漢音は「ト」のみで「渡来・過渡期」などを読み呉音の読みはない。中国語も日本語も「渡」は「水を渡る」の意味のみです。

『魏志倭人伝』に「始めて一海を度ること千余里对馬に至る」とあり「サンズイ偏の付かない「度」で書かれる。これは外洋を航行するのであり「度」の字を用いるのは仏教上にかかわるらしく、それは韓国を此岸とすれば津島国は彼岸になり意味深長である。

次に「また南一海を渡ること千余里」とあり「サンズイ偏」が付くのが数回にみられ、この「度・渡」を使い分けているのは著者陳寿の意図らしい。

『古事記』序文に語り部稗田阿礼について「目を度すれば……」とは「目に触れる」になる。「度・渡」の字に関わる神社が京都府城陽市寺田に鎮座する水度（みと）神社です。聖書マタイの福音書にイエスキリストがガラリヤ湖を歩いて渡った事を神主さんに話したら笑い飛ばされました。昔は「サンズイ」が付く「渡」の字であった水渡坂なる地名から神社命になっっています。

『観仏三昧経』に「世尊が大眾中に於いて虚空を歩かれると足下の千輪相輪から無数の蓮華が雨になり降る」とあり、キリストの物語に一脈通じた事例が仏教では釈迦が空中を歩くお話になります。

我家の先祖好古（義久）は平安時代に朝廷に仕えて大宰府に赴任し天禄三年（972）任地にて79歳で没しました。先祖の壮士であり次の詩文調に哀歎を感じます。

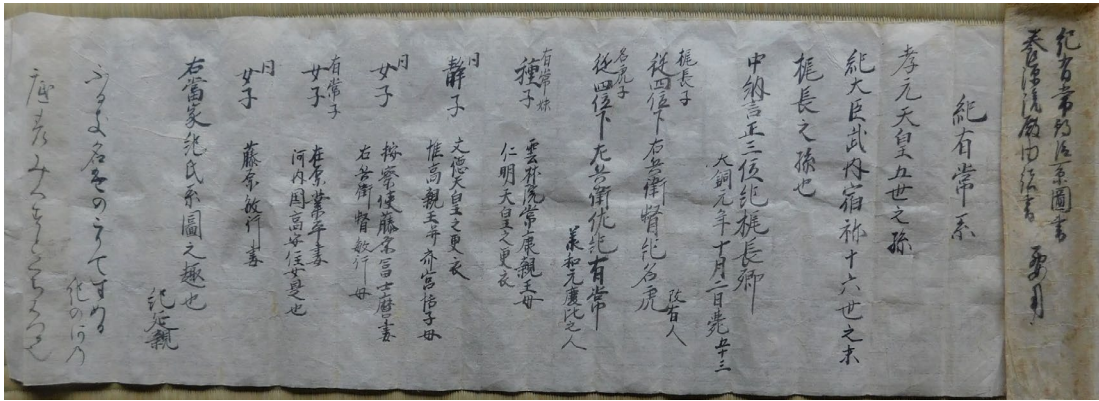
『史記』刺客列伝第二十六

「風蕭々として易水寒し壯士一度去ってまた帰らず」とあり、これは回数のみぎみの読み方で「旅」になる。

「乗西」の字の如く「運命に乗り西方」へ度ったのである。

古き名をのこしてすめる紀の河の

野尻幸男



璉城寺が所蔵する古文書に写真の
ような「紀有常系図」があります。未
尾に署名と和歌があり、和歌は「古き
をのこしてすめる紀の河の底砂黄金
きらめく」と読めます。紀氏一族の誇
りを詠んだ紀延親はどんな人物か、
パソコンで検索すると「東大寺手向
山八幡社」神主と分かりました。別掲
の「紀延親の系図」では紀有常の系統
とは四代前の紀麻呂の子息の代で別
れた紀氏一族で、飯麻呂―古佐美―
末成とつづく家系が延親につながる
孝元天皇や武内宿祢を祖先としてい
ます。

東大寺手向山八幡社は、奈良時代
聖武天皇が大仏鑄造をすすめる途上
で困難に遭遇したとき、その打開策
として宇佐八幡の神意を伺い、八幡
宮の神主一行を奈良に迎えて援助を
受け、大仏の鑄造が無事に終わって
のちに神威を尊んで大仏殿の前の鏡
池のほとりに八幡神の社殿を造営し
たのでした。

社殿は、1250年北条時頼によって現在の位置に移転されたこと
ですが、それ以前に、平家の南都襲撃で焼失した社殿を大仏再建にか
かわった重源が仮殿を建てています。重源も紀氏一族です。

八幡神の歴史は古く、その始祖は朝鮮半島に始まるとのことですが、
宇佐八幡の祭神は応神天皇や神功皇后であり、この皇室に陪臣として仕
えた武内宿祢の武内神社も祀られています。武内宿祢が「紀有常系図」
に登場しているのは当然のこと、ここにも手向山八幡社神主紀近延の
思いが伝わります。

ところで、紀氏一族が八幡宮にかかわったのは末成の子息・安根が神
司になり、7〜8代続いた後の末延が神主の始まりとされています。さ
らにこの家系の人物が春日社の神司や周防八幡の神司を務めたことも分
かりますが、紀氏の系図では、紀伊国造(和歌山市)との系統から別れた

【紀延親の系図】

- 飯麻呂(参議・大蔵卿)―古佐美(正三位・大納言)
- ―末成(大和守)-安根(東大寺八幡宮神司)
- ―永世(同)-延氏(同)-清延(同)-豊延(同)
- ―春延(同)-末延(神主の始)-好延(同)-国延
- (同)-重延(同)-延久(同)-延氏(同1232)-
- 延俊(同)-延家(同・従三位)-延広(同・周防
- 守)-延世(同・肥前守)-延光(同・肥前守)
- ―延泰(同)-延説(同・従三位1478)-延隆
- (同・宮内少輔)-延経(同・修理亮)-延村(同
- 宮内小輔・従4位下1554)-延義(同・兵部少輔)
- ―延貞(同・出羽守)―
- 延親**(神主20代・修理権亮)―
- 延夏(同21代・在任796~1801、上司・従三位)
- 延興(同22代・1820~1828、従三位、73歳没)
- 延寅(同23代・1830~1844、従4位下、出羽守)

紀氏一族の末裔から石清水八幡宮や八坂神社（祇園社）や富田林市の錦織神社（水郡神社）などで神職にかかわった人物がいました。紀氏一族にはこれらの神職や重源や聖宝ら僧侶なども出ています。これこそ「紀の河の川底に光る黄金」と延親神主が和歌に詠んだような面々がきら星のように輝いています。

東大寺と璉城寺

ところで延親は「紀有常系図」をなぜ璉城寺に遺したか。たしかな証拠はありませんが、「紀有常系図」を制作した江戸時代半ば、明和8年（1771）の年紀をもつ「璉城寺過去帳」が作成されています。

「紀有常系図」と「過去帳」の制作は、璉城寺にとって大きな転換があった享保10年以降の復興を目指す関係者の賜物と思われれます。

というのは享保8年（1723）、当時の住職が真言宗に改宗しようとして寺を売り払った罪で寺社奉行の預かりとなりました。審議の末に寺は誓願寺を離れ、天台宗養源院の末寺になりました。新たに入寺した泰宴師は「紀有常850年忌」を期して有常像を彫像しています。それ以来養源院派遣の歴代住職が再興に励んできた品々が残存していますが、その一つが実啓の時代の「璉城寺過去帳」です。

「過去帳」の監修した公祥上人は元禄時代に東大寺大仏を再興した公慶上人の弟子でした。過去帳に鎌倉時代の東大寺大仏を再興した重源上人やその勧進に啓発された元禄の大仏再興を勧進した公慶上人の名があり、さらに直近に入寂した塔頭の座主の名もみられます。ちなみに列記すると、庸訓上人（造東大寺大勧進沙門）、実賢訪印（宝蔵院）、性海得業（浄福院）、性意法師（金珠院）、浄住法師（地藏院）、晃海法師（清涼院）からです。これはなによりも璉城寺と東大寺の濃密な関係があったことを示すもので「紀有常系図」を書き残した手向山八幡社・延親神主の思いがうかがえます。

当時、璉城寺（紀寺）について「廃れた寺を再興した紀有常にちなんで

紀寺と称した」という由緒説が「名所図会」などで語られていました。これに対して村井古道は『奈良坊目拙解』のなかで「続日本紀に紀寺の奴の記事がある。紀寺は奈良時代に紀氏の氏寺として存在していた。有常再興説は間違っている」と指摘しました。元禄時代の歴史や観光に目が注がれていた風潮のなかで、俗説を排して正確な記録を残そうと璉城寺の関係者と紀氏一族が相和して、これら「紀有常系図」「過去帳」「有常像」が制作されたと考えられます。

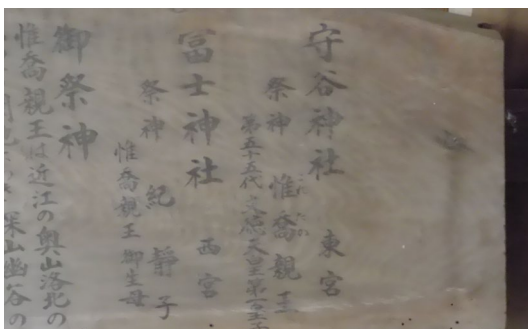
ゆかりの地を訪ねて

「紀有常系図」に登場する人物に注目したいと思います。

有常の祖父・梶長は桓武天皇の代に東大寺の行政機関の最高責任者「造東大寺司」でした。その邸宅が平城京一条通（いまの佐保小学校あたり）にあり、在任中に東大寺領だった蟹満寺付近の土地と交換した「交換文書」が『正倉院文書』に遺っています。梶長は東大寺とかかわった最初の紀氏の人物だったとみられます。



守谷神社と富士神社



その子「名虎」は、文徳天皇の後継者をめぐって藤原氏と争った際、名虎は相撲の力士として相手方を圧倒したという伝承があります。結果は時の摂政を握っている藤原良房の娘明子が生んだ惟仁親王が皇太子に決り、文徳天皇と紀静子の間に生まれた惟喬親王は涙を飲んだのでした。

静子と惟喬親王を祀る神社が叡山電鉄の鞍馬の手前二ノ瀬駅の近くにあって、一つの覆い屋に守谷神社（惟喬）と富士神社（紀静子）が並んで祀られています。案内板に「惟喬親王は深山幽谷の山地を開拓し貞観4年（862）二ノ瀬に仮居し、里人らに挽物の業を教え木地・挽物の祖神と仰がれる」との墨書も遺っています。

神社の前の東海自然歩道を東へたどると大原の里に出ます。そこに惟喬親王を祀る五輪塔があり、さらに東方の滋賀県と接する仰木峠を超えると親王を祭神とする「小椋神社」の奥宮と本宮にたどり着きます。惟喬親王の遺跡はまだあります。

琵琶湖の東に惟喬親王を「生地師の祖神」とする筒井神社（永源寺君ヶ畑）が祀られていて、鞍馬二ノ瀬の守屋神社に墨書されていた「生地師」がここでは祖神になっています。

京都市内に戻りますが、北区紫野の大徳寺の近くに惟喬親王の母静子の姉種子（いずれも名虎の娘）が仁明天皇の女御として生まれた常康親王ゆかりの寺・雲林院があります。常康の年齢は分かりませんが惟喬親王より年長の従兄弟でした。この寺は常康が淳仁天皇の離宮をもらい受け「雲林院」と称し、後に遍照が入り、桜と紅葉の名所として『古今和歌集』の歌枕や、謡曲「雲林院」として有名です。そして近くに玄武神社という惟喬親王を祀る神社があり、名虎伝来の刀を奉納しているそうです。実は前掲の「有常系図」にみえませんが、文徳天皇と紀静子との間には、長男惟喬親王、次男惟条（これえだ）親王、長女述子内親王、次女珍子内親王、三女恬子内親王が生まれています。

このなかで比較的消息のわかるのが惟喬親王と三女恬子内親王です。

恬子内親王は清和天皇の即位後に伊勢斎王として伊勢斎宮で青春時代を過ごします。この伊勢神宮に勅使として派遣されたのが業平でした。恬子内親王の母（静子）が「おもてなし」するようにと添え状を送ったことに従って二人は一夜をともにします。後世、『伊勢物語』の描写をもとに真相が詮索されています。若かりし在原業平には有常の娘（名は不詳）が筒井筒で歌詠みして結ばれた妻がありました。その妻とは、江戸時代文化5年（1808）伊能忠敬が大和を巡り在原寺を訪ねて、ここで「井筒姫の画像」をみると記録しています。「井筒姫」とは女性に名がなかった時代を証明しているかのようです。井筒姫と伊勢斎王・恬子とはこれもまた従姉妹でした。

『有常系図』の最後が静子を母とする女性「藤原敏行妻」です。藤原敏行は『古今集』の歌人であり、有常の死後30年後に亡くなり、三十六歌仙になっています。『古今集』撰者の貫之と親交があったのです。



（京都北区・紫野・雲林院）



（玄武神社）

ここまで『有常系図』に表記された人物をみてきましたが、有常にとって大切な妻の名前がありません。有常の妻とは業平妻と敏行妻の二人の母親です。彼女は藤原内麻呂の娘、興福寺南円堂を建てた冬嗣の妹であって、この時代、紀氏と藤原氏との婚姻関係は珍しいものでありませんでしたし、名前も判明しません。業平を祀る在原寺の境内に「姫丸神社」があり、その東方の山中に「稻荷姫丸神社」があり祭神です。

しかし、肝心の有常の名を遺す遺跡や墓が見つかりません。後世に伝える物証として「有常が再興したから紀寺と名付けられた」という伝承が誤伝であつても「紀寺」の地名を残したといえるでしょうか。

3年後の2026年が有常没後1150年にあたります。850年忌に彫像された有常像はちょうど300年の節目を迎えます。

「どうする璉城寺！」



編集後記に代えて 新年おめでとうございます

―病院「健康友の会」の機関紙に運営委員として毎号掲載しています。新年号に寄稿した文を少し修正して転載いたします―

12月14日は義士祭だった。「殿中の刃傷」も「仇討ち」も法律違反でありながら江戸市民の歓迎を背にして泉岳寺へ向かったという赤穂浪士たち…。奈良町にも一人の赤穂浪人が身をひそめていたとか…。

この日、私のパソコンに二回目のウィルスが舞い込んだ。前回は心臓検査のホルターをつけていた夜だった。急に画面が動かず、心をせかせかべたが遠慮し、パソコンの誘導に従って操作した。結果はまんまと詐欺にひっかかったのだった。この夜の心臓はどうだったか。心拍数が多少変化しただけとはいえ、心は悔しさいっぱいだった。

人の不安や心のすき間に親切を装って入り込む旧統一協会。入信者を「アダムとイブ以来、人類はサタンの血をひく世界になった」という教義へ導き、高額商品を買わせ寄付を求め家庭を破壊する。先ごろ成立した『被害者救済法』では救済に手が届かないという。

街中で「山上君ようやった：」と唇に手を当てる何人かに出会った。偽造拳銃も元首相殺傷も法を犯した行為であり、赤穂浪士の仇討ち―本懐を遂げた事件に似ている。恨みを晴らした江戸時代にタイムスリップする。しかしいま、戦後大切に守ってきた平和憲法が踏みじられ、「敵基地反撃」できる、「戦争できる国」に変えられようとしている。その手合いが旧統一協会と100人近くかかわってきた国会議員、数百人の地方議員を擁する政党だ。敵基地攻撃と軍事費増大は「国民の生命を守るため」と繰り返えず首相発言。「鬼畜米英。欲しがりません、勝つまでは」とマインドコントロールした焼き直し。その戦前の記憶を国民は決して忘れていない。

(野尻幸男)